

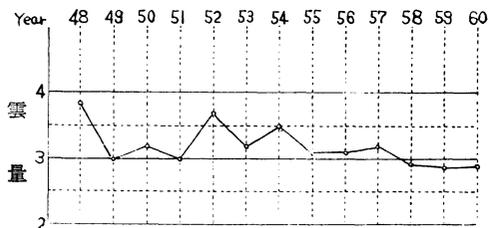
宮崎における夜間の下層雲量について*

安 井 豊

筆者は先に井無田正三技官の協力を得て宮崎における夜間の全雲量観測(天気第9巻2号)を調査し、次のごとき結果を得た。

1. 夜間全雲量観測値を月令別に統計してみると、月の明るい月令 10~22 の間は昼間値とほとんど同じで、月の暗い、または月の出ない月令23~9の間は昼間に比べ激減している。しかもその両者はその間については、ほとんど同じである。
2. したがって全雲量は昼間も夜間もほとんど同じであると推論される。
3. 従来の気象学書で統計として「夜間は雲量が昼間より激減している」としてあるのは闇夜の雲量観測が困難で、観測値が真雲量よりも過少であるからであろう。

そこでここでは下層雲量について同じような調査を都成与是夫技官の協力を得て行なってみた。ただし当台で雲量の観測を上・中・下層雲にわけて観測しはじめたのは戦後であるため、全雲量の調査には当台創立以後75年間の資料を使用した。下層雲の調査には昭和22年以後の資料しか使用し得なかったことを遺憾とする。



第1図

第1図は宮崎における昭和23年から35年までの下層雲量年平均値の変化を示したもので、これによれば観測年数が短いためか全雲量に現われたように特別な周期変化は認められない。一見次第に下層雲量が減少しているように見えるが、これはもっと長い周期変化の一

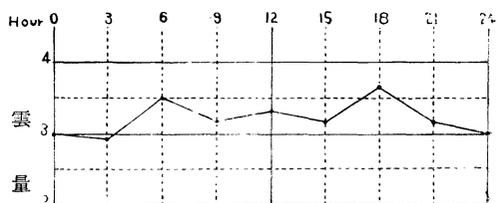
* On the Lower Cloud Amount at Night at Miyazaki Observatory.

** Yutaka Yasui: 宮崎地方気象台
—1961年11月4日受理—

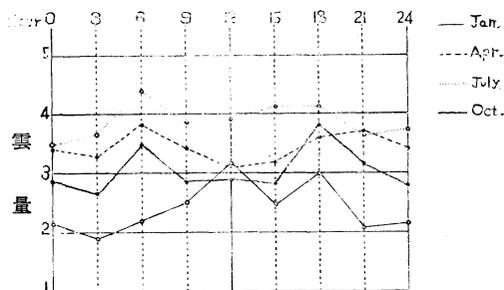
部を示しているか、それとも直線的に一意減少しているものか判断はできない。

次に日変化を見よう。

第2図は同年数間の時間別平均下層雲量であるが、これによれば日出没時に幾分多く、夜間は幾分少なくなっている。これを1, 4, 7, 10月の各月にわけてみると第3図のごとくなる。第3図によれば1月(冬期)が特異の形をしており、他の暖期のどれも同じような形である。暖期では日出没時頃がもっとも多く、夜間がすくな



第2図

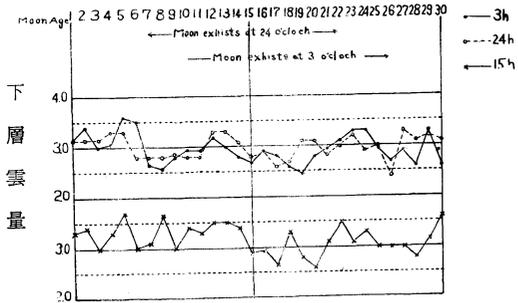


第3図

く、同じ暖期でも7月(夏)がもっとも多く、春秋は少ない。1月では正午頃がもっとも多く、15時頃1度減少して後日没頃に又極大に達し、夜間は減少している。暖候期の方は一般気象学書に記されているとおりであるが、冬季のものは特異である。これはいくら南国宮崎とはいえ冬期では上昇気流が発生しはじめるのは正午前からであるからであろう。

どれをみても夜間は雲量がすくない。前の全雲量についての調査の経験からみて、この夜間下層雲量の少ないことは観測値をそのまま信用してよいであろうか？

それを解明するために15時、24時、3時をえらんで日令別に統計した結果が第4図である。



第4図

各曲線とも同じような傾向を示しており、さらにいずれも日令による差が少ない。

気象の英語(45)

48. Possible, feasible および practicable

『可能な』という英語には上の3語が普通使われる。何でも構わず『可能な』といえば possible を使うというのは正確でない。3語は次のようにはっきり使い分けられているからである。

実際には大変むづかしいかも知れないし、また事情によっては実施不可能かも知れない場合でも、可能性があるなら possible といえるが、他の2語は使えない。しかし、そんなにむづかしくなく行なえ、またそうすることが望ましい時には、feasible を使う。また現在のままで、特別なことをしなくとも可能な場合には、practicable を使う。

(86頁より続く)

を行い、このうち小学校は60.1%の高い被患者を出した。一方都民の被患者は未だ発表されていないが、これまでの所65%にあたる650万人前後が流感に苦しめられたと推定される。また、死者は305人にのぼり、36年のB型インフルエンザによる死者123人を大巾に上廻った。

2. 火災～都(23区)の火災発生件数は毎年急速に増加している。本年の1、2月の発生件数は1917件

これを見れば日の明るい頃は概して下層雲量が少なく、月の暗い頃は概して下層雲量が多く、これは全雲量の場合と全く反対である。月の暗い頃に下層雲量が多いのは月の暗い頃には上・中層雲があってもこれを下層雲と誤認し易いためではあるまいかと思う。

総括して言えば全雲量と異なり下層雲量はたしかに夜間はすくなく、かつ観測された下層雲量は闇夜でもほぼ正確であるといえよう。

なお従前より月令による気圧配置変化の研究の一部として月令による雲量変化の調査が若干なされているが、筆者の前回の全雲量に関する調査と今回の下層雲量に関する調査の結果により、かかる調査には昼間雲量のみについて統計するべきであろうと思える。冬期は6時、18時の観測も不正確であろう。

付言

本調査に要した費用の一部は西部気象協会の研究補助費によった。一言付として同協会に謝意を表する。

抽象的な可能性は possibility で、feasibility ではない。計画等の可能性は、feasibility である。つまり執行委員会で論ずる計画は、possible plans ではなく feasible plans、または practicable plans でなければならぬし、学会で論ずるものは、feasible または possible な事柄が多い。feasibility を使った文例をつぎにあげる。“feasibility” でなければいけないことを味わって下さい。

The stratospheric analysis project of McGill University, through its daily cross sections and synoptic charts (up to the 25—mb level) has shown the feasibility of an intensive dynamic study of the middle stratosphere. (B.W. Boville)
(有住直介)

で、36年に比べると812件も上廻っている。日平均では33件になるが、毎日の件数を累算すると、1月1日～26日は緩慢な上昇(1日24件)、27日～2月22日は急上昇(1日42件)、23～28日は緩慢上昇(1日28件)のカーブをしており、雨量0.9mm以下の継続日数の日付とよく一致している。日平均(33件)と1日の発生数との差を取る取ると、1月23日より2月22日まで全部平均より多く発生し乾燥状態が火災の発生に如何に大きな要因となっているかがわかる。